

タイトル：2012 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2012年12月1日（土）14:30～19:50

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

Reexamining the Islamists' triumph in Morocco after the Arab Spring: A study of the 2011 parliamentary elections

白谷 望（上智大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科）

### 報告内容

本報告では、2011年モロッコ国民議会選挙の分析を通じて、中東政変以降の同国における権力構造を再検討した。

2011年初頭から中東・北アフリカ地域を襲った「政変の波」を受け、ムハンマド6世国王主導の「上からの改革」が行われた。2011年7月の憲法改正の後、同年11月に実施された国民議会選挙では、それまで第2党で国内最大野党として活動を展開してきたイスラーム主義政党「公正開発党」が、395議席中107議席を獲得し、晴れて第一党となった。こうして、同国では1997年の合法化以降野党として政権を批判することで支持を拡大してきた公正開発党が、念願であった政権の座を獲得したわけである。モロッコにおけるイスラーム主義政党の勝利は、チュニジアでの制憲議会選挙での「ナフダ党」勝利に続くものであり、また同選挙後には、エジプトにおいてムスリム同胞団系政党「自由公正党」が議会選挙で第一党を収めている。こうしたことから、中東政変の特徴の1つとして、イスラーム主義政党の躍進が挙げられている。

しかし、選挙制度や選挙結果に注視すると、同国における公正開発党の勝利は、上述のようなイスラーム主義政党の躍進ではなく、国王が恣意的に同党を政権政党として受け入れたことが明らかになることを証明した。そして、同国の強靱な政治体制は、中東政変を経ても尚したたかに生き延びていると結論付けた。

### ディスカッションの概要

本報告に対しては、マグリブ諸国におけるイスラーム主義運動・組織の専門家であるフランソワ・ブルガ氏（Institut français du Proche-Orient）からコメントを頂戴した。まずそのコメントとして、ブルガ氏からは研究の方向性や報告の結論には賛成であるというお言葉を頂くことが出来た。一方で、今後この研究内容を一層発展させていくため、報告者が本報告で割愛した議論の補足説明や見落とししていた視点などをご指摘頂いた。それらは第1に、同国における代議制の役割であり、研究対象として選挙や議会を扱うのであれば、とりわけその盤石な王制下での代議制の役割を説明する必要があるとのご指摘を受けた。第2に、今後の研究では、本報告では扱うことが出来なかった同国最大で非合法のイスラーム主義組織「公正と慈善の集団」の存在を無視することは出来ないとのコメントを頂いた。これはすなわち、王制にとっての真の「反体制

アクター」は議会の外に存在し、既存の政治領域に参加するアクターのみを分析対象とすべきではないとのご指摘がなされた。今回ご指摘頂いたこうした点を、今後の研究で積極的に取り入れていきたいと思う。

### **会議参加の感想**

自身の報告に大変有用なコメントを頂戴するだけでなく、他の報告者の報告・コメントからも、学ぶことが非常に多かった。ディシプリンや地域は違えど、研究を深化させていく上で必要不可欠となるノウハウなどは共通していることを強く感じた。また、他の報告者やペイルートの研究者らとの交流は、非常に刺激的で有意義なものであった。

このような貴重な機会を与えて下さったことに、心より感謝申し上げます。